

京都大学	博士（文学）	氏名	向井 佑介
論文題目	中国初期仏塔の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>インドに誕生した仏教は、おおよそ400年のときをへて、中国に伝えられた。仏教の中国初伝には諸説があるものの、後漢末には楼閣式の仏塔を中心とした本格的な寺院が成立していたとするのが通説である。中国の楼閣式仏塔が、インド文化と中国文化との融合によって生みだされたことは、その構造からみて疑う余地がない。また、それが中国から朝鮮半島や日本列島へと伝播したことも、古建築や考古資料によって裏づけられる。しかし朝鮮や日本の初期仏教寺院は、伝播の過程で情報が取捨選択され、定型化し、パターン化したものであるがゆえに、それだけをみても本来の意味を明確にできない場合が少なくない。中国初期仏塔と仏教寺院の検討をつうじて、東アジアの寺院建築や伽藍配置のもつ本質的な意味を究明することが、本研究の最大の目標である。</p> <p>中国初期仏教寺院の遺跡や遺物には、建築遺構、石窟寺院、塔、仏像、経典、舍利容器、仏具、僧具などが含まれる。それらを理解するためには、考古学のみならず、建築史学・美術史学・仏教史学など諸分野の知識が必要となる。とりわけ資料の少ない中国初期仏教寺院の研究においては、ひとつの専門分野のみからわかることは少ないため、必然的に諸分野を横断して研究を進めざるをえない。また、寺院は仏教儀礼・信仰の場であり、同時に僧侶の修行・生活の場でもある。そうした寺院の空間構造をいかに把握し、復元していくのかは、中国初期仏教寺院の研究において重要な課題となる。</p> <p>そうした課題をふまえて本研究では、考古資料を中心として関連する文献史料と図像資料を総合的に分析し、後漢から南北朝時代における仏塔と仏教寺院の具体的様相を解明しようと試みた。第Ⅰ部（第一章・第二章）では仏塔および仏教寺院の中国伝来と受容の過程について歴史的経緯と思想的基盤をふまえて整理し、第Ⅱ部（第三章・第四章）では東晋から南北朝時代における仏塔の舍利埋納について論じた。それらの検討により、インドから伝来した仏塔が中国的変容をとげていく過程を明確にした。つづく第Ⅲ部（第五章・第六章）では雲岡石窟の発掘調査成果に対する考古学的検討と仏塔の図像学的検討をもとに寺院景観の復元を試み、また第Ⅳ部（第七章・第八章）では主に北朝仏教寺院の発掘成果から寺院の空間構造を復元し、その思想的背景や東アジア諸地域との関係を考察した。</p> <p>第一章「仏教寺院の中国伝来」では、文献史料と考古資料をもとに、後漢から三国時代における仏教信仰と仏教寺院の具体的様相を確認した。中国仏教寺院の構造を具</p>			

体的に描写した史料として最もふるいのが、後漢末に笮融が建立した「浮図祠」の記録である。笮融による「浮図祠」建立の具体的な年代は、靈帝の晩年から獻帝の初期、紀元後190年前後の数年間と推定した。そして、襄陽において新たに発見された相輪をもつ樓閣明器は、先行研究の指摘するとおり「浮図祠」を表現したもので、その年代は「浮図祠」建立の時期と大きく変わらないと判断した。一方、河南省鞏県の窖蔵からは、後漢の大量の青銅器とともに、銅塔形器や樹形座と称される特殊な遺物が発見されている。この銅塔形器は銅製のストゥーパにほかならず、中国の初期仏教信仰のなかで西方のストゥーパをそのままの形態で受容した事例があることを示唆している。同時に出土した樹形座も、ガンダーラ出土とされる三宝標に類似しており、銅製ストゥーパとともに中国初期仏教信仰の脈絡のなかで礼拝対象とされた可能性が高い。かつて河南省洛陽では、2世紀後半ないし3世紀のものとされるカロシュティー文字銘をもつ石片が収集されており、銘文の内容から仏教寺院にともなう井戸枠の破片と考えられた。その年代や位置づけにはなお多方面からの検討を要するとはいえ、後漢末から三国時代の洛陽にガンダーラ語とカロシュティー文字を理解する集団が存在し、そうした人びとが仏教寺院を建設し、またガンダーラのストゥーパの造形を伝えた可能性がある。

第二章「仏塔の中国的変容」では、樓閣式仏塔の成立過程とその思想的背景を考察した。インドに起源する覆鉢形ストゥーパは、漢代の中国に存在した樓閣建築と融合して樓閣式仏塔を形成する。その成立にあたって、インドやガンダーラにおける仏教建築の高層化が影響をおよぼした可能性はあるものの、むしろ中国が仏教を受容するに際して、仏陀と神仙を同格視したことにより、仏塔が神仙をまねく台に類する建造物と理解されたことが、思想のうえで大きな影響をあたえた。樓閣式仏塔が神仙思想の影響下に出現したことは、露盤という仏塔の部分名称からもうかがえる。露盤は仏教に由来することばではなく、神仙をまねく台の上に設けられた承露盤に由来する用語だからである。一方、雲岡石窟や敦煌莫高窟の中心柱窟にみるように、当該期の仏塔はしばしば須弥山と結びつけられた。それは仏塔と須弥山が天地をつなぐ軸としての役割を共有していたためであり、塔内において禅観を實踐し、あるいは塔を供養礼拝することで、須弥山を介して兜率天の弥勒菩薩のもとへ往生することが期待された。仏塔は地上世界と天上世界とをつないで、昇天・昇仙を具現化した装置として、修行者や在俗信者の信仰を集めていったのである。

第三章「北魏興安二年舍利石函の図像学」では、かつて河北省定県の静志寺塔地宮から出土した北魏興安二年（453）銘の石函について検討した。石函に刻まれた図像内容を確認したあと、雲岡石窟・敦煌莫高窟・キジル石窟などの類例と比較しつつ図像の系譜関係を整理し、さらに石函の思想的背景を考察した。石函側面には、獣のいる深い山岳中で禅定修行をする比丘たちがあらわされ、その山岳紋様は雲岡中期の諸例

よりふるい要素をもつ。比丘の服制は通肩のほか覆頭衣があり、持物には錫杖や頭陀袋がある。これらの要素は雲岡石窟や敦煌莫高窟の禪定比丘像と共通する部分が多く、日本の法隆寺金堂旧壁画や玉虫厨子板絵の比丘像とも通ずる。石函上段の窟中禪定比丘とともにあらわされた菩薩坐像などの解釈についてはなお決定的な証拠を欠くものの、釈迦と五比丘とする説と弥勒と大迦葉とする説の2案を提示した。一方、石函に刻まれた山岳紋様と比丘図像は、そのテーマが弥勒信仰と無関係ではなかったことを示唆する。石函にはもともと釈迦の舍利が納入され、また当時の仏塔にはしばしば須弥山の造形がともなうことから、地下に埋納された釈迦の舍利から天上の弥勒へという思想が石函の図像に反映されたと推測した。

第四章「南北朝仏塔の舍利埋納」では、舍利埋納にかかわる文献の記載を整理するとともに、近年公開された南朝舍利石函の新例と、遺物を再検討した北魏太和五年（481）石函、そして今世紀に鄴城南郊で発掘された東魏・北齊塔基2例をもとに、南北朝時代における仏塔の舍利埋納について考察した。文献の記載によると、東晋の慧達は長干寺三層塔下に埋められていた三石碑の下から「鉄函—銀函—金函」の三重容器に封入された舍利を発掘し、慧達が埋納して梁武帝が発掘した舍利は「石函—鉄壺—銀罍—金鏤罍」の四重容器と「石函—琉璃椀」の二重容器におさめられて塔心礎下に安置され、さらに梁武帝は舍利を「石函—七宝塔—金罍—玉罍」の四重容器に入れて二塔の下に再埋置した。実際に塔址から発掘された資料では、北魏太和五年（481）石函の埋納品が最も充実している。石函銘に孝文帝と文明太后が発願した旨が記され、なかから金の垂飾付耳飾やササン銀貨、響銅・鍮石製品、ガラス容器、各種珠類などが大量に出土した。舍利容器の構成は確定困難とはいえ、石函は塔基壇内に直接埋納され、その石函内に「ガラス鉢—銅鉢—ガラス小壺」を入れ子状にかさねて安置した、あるいは「ガラス鉢—ガラス小壺二点」と「銅鉢—フラスコ形ガラス小瓶」にわけて安置した可能性が想定された。また近年、東魏・北齊鄴城の南郊でふたつの塔基壇が発見され、天保九年（558）創建の大莊嚴寺に比定される核桃園一号建築址では基壇内からガラス瓶や珠類を埋納した石函が出土し、趙彭城仏寺塔址では基壇内の心礎下方に構築された磚函からガラス瓶の破片などが出土した。舍利埋納方式からいえば、基壇内に石函を直接埋めた核桃園一号建築址が古式に属し、朝鮮三国や古代日本の舍利埋納とも関係が深いのに対し、趙彭城仏寺塔址のように心礎下に磚函を構築する方式はやや新しく、それが初唐期に地宮へと発展していくものと考えられた。

第五章「雲岡石窟の瓦と寺院景観」では、かつて東方文化研究所が調査した雲岡石窟などの瓦を検討対象とし、同範瓦の先後関係と共伴関係をもとに5世紀の瓦編年を提示した。その編年では、雲岡石窟周辺の寺院建築を1～3期に区分した。1期は東部台上寺院址と第8窟前で、おおよそ470年代を中心とした時期を想定した。つづく2期には、方山永固陵と第9・第10窟前の資料があり、おおよそ480年代とした。3期に

は西部台上寺院址・東台遺址・西梁廢寺址があり、480年代末から490年代前半に位置づけた。1期の東部台上寺院址は雲岡石窟の瓦葺建築のなかで最古段階に位置し、その建物は石積の基壇に朱塗りの漆喰壁を用い、獅子頭の門枕石をそなえた立派なもので、文献との対比から曇曜が訳経の拠点とした場所と推定された。また1期の第7・第8窟や2期の第9・第10窟などでは石窟前面をおおう木造の仏殿建築が建造され、同範瓦の一部は平城北郊の方山永固陵にも供給された。3期になると西方諸窟上方において西部台上寺院址が建設され、近年の発掘によってそれが方形僧院のなかに塔を配したものであることが判明した。また石窟東方の丘陵先端で発見された東台遺址は、基壇周囲に割石を積み、基壇上に割石積の牆壁と石壇を設け、木造瓦葺の屋根をさしかけた塔址であったと考えられる。これらのことから、北魏の洛陽遷都前には、石窟の前面と台地上に寺院建築がならび、さらに石窟東西の丘陵先端に塔が林立する景観が出現していたことが明らかになった。

第六章「雲岡石窟の仏塔意匠」では、雲岡中期から後期にかけて、石窟内外に多数あらわされた仏塔の意匠について検討した。その意匠は、形態により石塔形重層柱・覆鉢式塔・樓閣式重層塔に三大別される。雲岡では、中期初頭の第7・第8窟において、ガンダーラ彫刻の影響のもと、塔に類似した石塔形重層柱が出現する。この時期、石窟全体が木造建築を模して統一的に設計されるようになり、石窟前面や台地上で木造建築が造営され、石窟景観が大きく変化する。一方、第18窟では炳靈寺石窟などの影響をうけた二仏並坐の多宝塔がはやくに出現するが、それを除けば覆鉢式塔のほとんどは中期後半から後期に位置づけられる。中期後半には、石塔形重層柱が衰退し、中国式の瓦葺木造塔を模した樓閣式重層塔が主流となる。とりわけ中期末には、樓閣式重層塔を左右一対であらわした双塔の仏龕や石窟が出現し、後期にかけて流行する。それらは、法華経信仰や二聖（文明太皇太后と孝文帝）崇拝を背景として登場したと考えられ、石窟周辺の木造塔とともに多数の塔が林立する寺院景観を形成していったことが明確になった。

第七章「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」では、北魏前期寺院の発掘成果をもとに寺院の年代と堂塔の基本的な配置を確認し、その堂塔内部に仏像がどのように安置され、またそれがいかなる信仰とかわかっていたのかを明らかにした。まず、方山思遠仏寺・朝陽思燕仏図・懷朔鎮仏寺址から出土した瓦の考古学的分析と文献史料の検討をもとに、これらの寺院が5世紀後葉に相次いで造営されたことを明確にした。太和三年（479）前後に平城北郊で造営された方山思遠仏寺は、台地上の永固堂（廟）に隣接する寺院と崖下の塔院とにわかれて存在していた。崖下の塔院は、石積の二重基壇の中央に塔があり、後方に仏殿らしき建物があることがわかっている。つづいて480年代に三燕龍城の故地に建設された思燕仏図は、基壇周囲をとりまく大型回廊が存在し、塔院を形成していた。さらに490年前後に建設された懷朔鎮仏寺では、南に塔基壇

があり、北側にも建築基壇があることが確認されている。これらの寺院からは、よく似た特徴の塑像が出土し、塔内を彩色の塑像や壁画によって装飾していたことがうかがえる。そうした手法は、ガンダーラのストゥーパに淵源し、敦煌や河西地域の中心柱窟と共通する一方、遷都後の洛陽永寧寺にも継承され、また朝鮮半島や古代日本の寺院にも一定の影響をおよぼしたと考えられる。

第八章「中国における双塔伽藍の成立と展開」では、中国を中心として東アジアにおける双塔伽藍の出現と伝播について論じた。中国の双塔伽藍は、文献史料による限り東晋代にさかのぼる。武昌昌楽寺や建康長干寺などの例から、4世紀の江南では、インドやガンダーラの寺院にみる奉獻塔の造営や塔の増広のように、複数の塔を建立したり、塔を増築したりする場合があったことがうかがえる。北朝から隋唐期の双塔は、それとは異なる発想のもとに成立した。5世紀の北魏では孝文帝と文明太后の「二聖」のため王遇が暉福寺に双塔を発願し、同じころ雲岡石窟では双窟や双塔の表現が流行した。隋代には、同じく「二聖」あるいは「二皇」と称された文帝と献后のため大興城の南西で大莊嚴寺と大総持寺にそれぞれ七重塔が造営され、また彼らが発願して法界尼寺に双塔が建立された。さらに初唐期には高宗と武后がやはり「二聖」と称され、武后による革命と密接にかかわる長安の大雲経寺にも双塔が存在した。それらの影響のもと、同時期の新羅や日本にも双塔伽藍が伝えられたと推測した。

第一章から第八章での検討をふまえ、終章であらためて中国における楼閣式仏塔の成立と展開、およびその思想的背景について整理した。インドから中国へと伝来した仏塔は、漢代の神仙思想と結びついて高層の楼閣建築へと変貌をとげた。この段階の寺院は、塔を中心として構成され、塔内に仏像を安置していた。それらの特徴は、時代とともに変化しつつ、南北朝以降の寺院に継承されていった。こうした中国独自の性質をとどめつつ、東晋・五胡十六国における本格的な仏教文化の受容をへて北魏の前期には、天と地をつなぐ仏塔の性質が須弥山と結びつき、弥勒信仰の隆盛とあいまって、生天のための装置へと発展した。さらに南北朝時代には、皇帝・皇后らが率先して仏教に傾倒し、公私の財を投じて高層の塔を建立し、また北朝隋唐においては皇帝・皇后ら「二聖」のために双塔が建立されることもあった。中国初期仏塔は、このようにして高層化をとげ、あるいは双塔の伽藍を創出し、また朝鮮半島や日本列島へと伝播していったのである。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀前半までの研究により、インドやガンダーラにおける高層化した仏塔と、中国漢代における神仙思想にもとづく高層建築が融合ないし習合することで、中国において楼閣式仏塔が誕生した、という知見がえられていた。一方、最近の中国では初期寺院に関する新たな調査研究が飛躍的に進展した。また、20世紀前半に日本人研究者によっておこなわれた雲岡石窟寺院などの調査成果を、現在の研究水準で整理・検討することによっても、少なからずの新たな成果があげられてきた。本論文において筆者は、こうした新たな考古学的成果の検討に加えて、建築史学・美術史学・仏教史学などの諸分野の研究成果も参照することで、後漢から南北朝時代における仏塔と仏教寺院の具体的様相を解明しようとした。また本論文は、東アジア世界における寺院建築や伽藍配置のもつ本質的な意味を究明することも視野にいれている。

本論文は、4部構成からなる。第Ⅰ部（第一章・第二章）では、文献史料と考古資料の整理をもとに、後漢から三国時代における仏塔および仏教寺院の中国伝来と受容の過程を検討した。そして、インドに起源する覆鉢形ストゥーパが、中国の楼閣建築と融合して楼閣式仏塔を形成する中で、神仙思想が一定の役割を果たしたとする学説を、最近の発掘調査成果をもとに改めて検証した。

第Ⅱ部（第三章・第四章）では、東晋から南北朝時代における仏塔の舍利埋納について論じた。第三章では、北魏興安二年銘の石函に刻まれた山岳中で禅定修行する比丘像が、雲岡石窟・敦煌莫高窟・キジル石窟などの類例と共通する部分が多く、日本の法隆寺金堂旧壁画や玉虫厨子板絵の比丘像とも通ずることを示した。そして、こうした図像が描かれた思想的背景に、弥勒信仰があった可能性があることを指摘した。第四章では、近年知られるようになった南朝・北朝に関係する舍利石函および共伴遺物についての検討がおこなわれた。中でも筆者らによって整理報告された北魏太和五年石函出土文物は、朝鮮三国や古代日本の仏塔に伴う舍利埋納の起源と展開を考える上でも重要である。

第Ⅲ部（第五章・第六章）は、雲岡石窟の発掘調査成果にもとづき、当時の寺院景観の復元を試みている。筆者は、東方文化研究所が調査した雲岡石窟などで採集された瓦を、同範瓦の先後関係と共伴関係をもとに編年した。この成果にもとづいて、雲岡石窟周辺の寺院建築の築造時期が明確になり、石窟寺院の変遷と共に時期ごとの景観が具体的に復元された。また、雲岡石窟の内外に刻まれた仏塔の意匠を分析することによって、ガンダーラ彫刻の影響のもとに出現した石塔形重層柱に代わって、覆鉢式塔、さらに楼閣式重層塔が表現されるようになる、という変遷過程を明確にした。

第Ⅳ部（第七章・第八章）では、北朝仏教寺院の発掘成果から、当時の寺院の空間構造を復元し、その思想的背景や、東アジア諸地域との関係を考察した。北魏前期寺院における堂塔の基本的な配置や、仏塔内部における仏像の安置状況を整理した第七

章は、その後の中国における寺院のみならず、朝鮮半島や古代日本の寺院の出現・展開を考える上でも、重要な研究成果である。また北朝から隋唐期の双塔伽藍の成立・展開において、「二聖」・「二皇」と称された皇帝・皇后の存在と関連づける第八章も、同時期の新羅や日本で出現する双塔伽藍の受容と展開を考える上で、新たな視点を提供している。

これまでの検討を踏まえ、筆者は終章において、中国初期仏塔の受容・展開過程を、以下のような3段階に整理した。中国仏教寺院の黎明期である第一段階（3世紀以前）では、漢代の神仙思想と結びついて高層の楼閣建築としての仏塔が出現した。仏教寺院の本格的受容期である第二段階（4・5世紀）では、宝珠・九輪・請花・覆鉢を頂部にのせた木造多層塔が定着し、塔の初層内部には塑像を安置し、塔下にはしばしば舍利が埋納された。そして、仏教寺院の発展期・転換期である第三段階（6・7世紀）では、皇帝・皇后らが率先して仏教に傾倒することにより、公私の財を投じた高層の塔が建立されるようになり、唐代には木造重層塔にかわって、磚塔が主流を占めることになる。

以上のように本論文では、新たな考古学的調査研究成果をもとに従来の研究を検討することで、中国における楼閣式仏塔の成立と展開、およびその思想的背景について、総合的な見通しを示すことができたことに大きな意義を見いだすことができる。また、中国における仏教の受容と展開だけではなく、朝鮮半島や日本列島における寺院の受容と展開を考える上でも、本論文が示唆するところが少なくない点も評価したい。

もっとも、中国における初期仏塔や仏教寺院の実態については、まだ不明な点が多くなく、今後の調査研究が進む中で、さらに議論が進められなければならないであろう。また、今回の研究成果をもとに、周辺地域への仏塔の伝播様相についてもさらに検討される必要がある。そうした点は、筆者自身も自覚しているところであり、本論文を足がかりとして、さらなる研究の進展を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年2月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。